LIFE活用による介護DX推進

第3回 施設経営者としての果実

株式会社
ブルーオーシャンシステム
開発部 企画グループ課長
沖本 崇
（おきもと たかし）
映像制作会社、プライダルカメラマンから介護業界へ入職。営業部門、カスタマー部門を経て現在は主に営業推進、広報活動に従事。創業から介護業界のDX化を推進する会社の思いを伝えるエバンジェリストとして活躍中。

今回は具体的にユーれ、現在60を超える事業所で活用されています。

導入当初から「ICT

ALSOK介護（代表 リテラシーが低い業界体

取締役社長・宮澤裕一氏）質「人に依存する紙運用

では2018年より弊社 ノウハウ」などを根本か

システム導入が開始さ ら改善し、「導入後の費用

対効果」の可視化を行うため、弊社システムと見守りセンサー等を組み合わせ、職員1人件費1名分以上のコスト改善となるモデルを構築しました。

私が一番驚いたのは、本部スーパーバイザー（以下SV）が「これからシステム導入を経験する事業所責任者およびケアスタッフは導入への不安が大きく、且つ〝見えないものへの恐れ〟がある」ことを明確に意識されていて、初期段階でケアプラン移行やタブレット操作などの導入支援を集中的に行い、一気に本

成功体験の好循環が続く

◀コスト改善モデルを構築した

稼働させるノウハウを確立して実行したことです。結果的に、大半の事業所は標準的な業務移行期間と定めている2ヵ月を下回る期間で本稼働しています。

本部SVはシステム導入により、結果として業務の標準化につながり各施設への現地指導回数が大幅に改善されて、帳票管理などコンプライアンスに関わる指導も現地でできないようなったり、緊急時の近隣施設との職員勤務の調整が容易になることなどを効果として挙げています。副次的な効果としては、システム運用を習得した職員の離職率が下がり、法人全体として人材とノウハウの定着が教育コスト減につながり、システム導入原資を生み出し、追加導入が推進できる好循環を加速させています。

次回は見守りセンサーを含めたICT導入の課題と成功事例をご紹介致します。

高齢者住宅新聞：
2021年7月7日号より
（発行元：高齢者住宅新聞社）